

酒井重喜教授の退職記念号によせて

学 長 細 江 守 紀

酒井重喜先生は、1971年3月に京都大学経済学部をご卒業後、同大学大学院経済学研究科に進学され、1973年3月に同大学院経済学研究科修士課程を修了されました。また、1976年3月に同大学院理論経済学経済史学を専攻され、博士課程を単位修得退学後、同年4月に熊本商科大学（現・熊本学園大学）の経済学部講師として着任されました。

1981年1月には助教授そして1985年7月に教授へと昇格されており、1991年には「近代イギリス財政史研究」で経済学博士の学位を京都大学より授与されています。

学務ご多忙な中、1994年1月から1995年12月まで国際経済学科長、2002年1月から2008年3月まで大学院の経済学研究科長、2010年8月から2011年12月まで経済学部長をお務めになりました。

先生のご専門はイギリス経済史であり、西洋経済史の科目を担当されています。授業においては、日本における経済史学（戦前・戦後）と西洋経済史学との比較検証をし、戦後史学批判の検証を行うことを実践されています。

研究成果においては高著『経済史序論』（同文館出版、1991年）、『混合王政と租税国家 近代イギリス財政史研究』（弘文堂、1997年）、『チャールズ一世の船舶税』（ミネルヴァ書房、2005年）、『近世イギリスのフォレスト政策 財政封建制の展開』（ミネルヴァ書房、2013年）があり、加えて、M.J. ブラディック『イギリスにおける租税国家の成立』（ミネルヴァ書房、2000年）の翻訳本を出版されています。他にも、業績一覧にある多数の学術論文や学会報告に見られるとおり、長年にわたって近世期のイギリス経済史の研究を続けておられます。

古希を過ぎてもなお研究の勢いは増し、2021年1月には、ミネルヴァ書房より『十七世紀イギリス財政史論：「国王私財」と二つの革命』が上梓されることとなりました。「混合王政における国王自活原則と議会課税合意原則の二元主義の抵抗と難死」という主題を、数十年にわたる一貫して問題意識とされた研究が、この書籍へと結実しました。

先生は兵庫県龍野市（現・たつの市）のご出身で、テニスのご趣味とお聞きしています。また、昨年まで本学テニス部の顧問をお務めになられています。ラケットを片手に颯爽とキャン

パスを歩くお姿をよくお見かけしたものです。

1976年より長年にわたって本学の発展にご貢献いただいた酒井先生は、2019年3月をもって退職となりました。引き続きシニア客員教授として教育・研究・社会貢献にもご尽力いただいていることはたいへんありがたいことです。これから先生の残された財産を大切に活かして、地域においてさらに輝く大学へと発展させていくことが後進としての私たちの役目です。

酒井重喜先生の今後のご健勝とご活躍を心より願ってご挨拶に代えさせていただきます。